

個性的だった新聞部員

森 邦彦

(昭和37年卒)

私達が新聞部員時代に「石桜新聞」は六十号を迎えました。一つの区切りにと某先生に寄稿をお願いしたところ、簡単に断わられたことがあります。そこで「断言」と云う欄に次のように記したのでした。『本紙六十号。年(満)では還暦だがこの場合は祝数ではないそう。残念——。ともかくも六十号の歴史の記載録は堅い』

石桜も五十年を迎えられた。一口に五十年と言ってもやはりそれは長い一つの歴史です。一卒業生として、素直に理事長はじめ、関係方々の御努力と御苦労にお礼とお祝いを申し上げたいと思います。

ですが私はこの歴史に汚点をつける大変なことをしてしまいました。新聞部をつぶしてしまつたということ。年に一度、当時の部の連中と飲み会を持っているのですが、この会で「新聞部をつぶしたのは森だ。後に配慮がなかった」と怒られます。五十年史にこんなことを書かねばならぬのは残念ですが、この紙面をおかりして石桜会の皆様にお詫びしなければなりません。が、必ずまた復活されることを心から願っています。

ただ、新聞作りは好きでなければできないと思いますし、またバカで恥知らずでなければダメだと思えます。私、今想っても、よくも恥知らずにやつたものだと思うことばかりです。シンブンのシの字も知らずに入部して作れたのも、うまくコ

ンビになれた仲間が居たからで、その上、部の伝統や先輩の方々に一種の魔術をかけられていたからだったようです。

入部した時のメンバーにインスピレーション部長の佐々木保五郎さん、社会派の鏡英夫さん、総合総務の吉田正次さんがおられました。その方々に見知らぬ大先輩方の愉快な部生活やロマンのある学生生活の話など聞かせられながら楽しい部生活を送りました。原稿一枚書くのも苦で仕方なかった私は、書かねばならぬ、やらねばならぬと、いつか一種の暗示にかけられ、変じて好きになつていったという訳です。

すべては顧問の西在家先生におんぶして、同輩の川村卓、三田忠宣君(すでに他界)後輩の藤沢進、石田亮、内藤直樹、目時宏康、米島克紀君のメンバーで必死に作りました。その結果、岩手日報コンクールに二位入賞することができたのです。

コンクール入賞も目標ではありませんでしたが、後で想うとそれは部生活のいわば表面的なものに過ぎなかつた気がします。受賞以上に部内の生活が随分と楽しかつたのです。

私達の部室は二階中央、他の部に申し訳ない程立派に一室を占領していました。その部室は校内で一番汚なかつた所です。思い出すとゾツとするのですが、冬ストープが入つても原稿や新聞が部屋一杯に散らかっていました。私共に言わせればその方が仕事やりやすくて良いということになります。このことでは柴内先生の竹ムチを尻に何度受けたことか、叩かれない部員は恐らく居なかつたと思えます。

この部室で原稿締切りの一週間程前からは毎日、

今の後輩諸君には考えられないようなことをやつたのです。たとえ試験があつても毎夜九時、十時頃まで部室で遊び、騒ぎながら原稿書きをしたものです。勿論、親達は相当心配していたようですが、何ともこれが楽しみでした。腹が減ると材木町の「かじや」というそば屋さんからラーメンを取り、これがまた楽しみだったわけです。出前に来るこの「かじや」のおやじさんが面白い人で、商売の方が忙しい時間でも、昔の新聞部の話や、政治、社会の話を一くさりやつていくのです。この日が某先生の宿直だったりすると大変なことで、原稿一枚もできない有様でした。

他にも余禄がありました。新聞広告です。広告にはできるだけ映画広告をと駆け回つたものです。映画広告は広告代のかわりに招待券をもらえるからです。おまけに広告取りに行つては「ちよつと見せてください」というあんばい、おかげで随分映画を見られました。時効と思つて書きましたが問題になつて当然、記事にもなる、黒いピーナツ風な利得でした。

部員には特異な人が居ました。他を関せずといったところでしょうか、原稿も書かずに試験勉強をしている人。人が記事を書いていても相撲をとつていて、突然静かになつたかと思うとペンを握っている人。相撲をしながら内容を考へていたのでしょうか。穴埋めに詩でも書いてくれとなると十分足らずで書いてしまう人。校長先生にある件でインタビュールに行き、「そんなことに答える必要はない」と言われ「ハイそうですか」と粘りもせず帰つてきて、記事にならぬと困つていた早合点な人。原稿も書かずに、ただ騒ぎ、ラーメン

を食べては遊び、それでいて居ないと気になる人。そんな人達がいて新聞ができたのは不思議なくらいです。

いろんなことを書きましたが、みんな懐しい思い出で、大げさに言えば新聞部の生活は私達の偽りのない「ロマン」の発散でした。青春は「ロマン」です。何か漠然としています、例えばバカげた感情や発想、行動でも、若者には大切です。押しつけられたり、形にはめられたものからは仲々生まれ難いもので一度反発してみるか、考え直してみなければなりません。「ロマン」はエキストもあり、創造の糧でもあると思います。

社会的なことは余り知らなかった高校生活でしたが、安保の活動が始まり、経済も神武景気に向って伸びはじめた時だったと思います。テレビの普及も一段階にあつて情報が視聴両方から簡単に入ってくるようになりました。それでも災害等はまだまだ自然的だった時代でした。

良きにつけ悪しきにつけても、このせわしい今、「ロマン」は失いたくないと思つていますが私は今――。

水泳部の黄金時代

中沢正博

(昭和40年卒)

私の水泳の現役生活は、岩手国体出場が最後であつたが、炎天の夏を迎えると、さすがに水に対する誘惑をぬぐい去ることはできない。時々岩高プールを訪れ、少々太り気味の身体を気にしつつ泳いだりしているが、ここ数年來、プールには往

年のような活気は見られず、プールサイドといえは雑草がのび放題、その荒涼とした光景は何とも言いようもなく寂しい限りである。

私が水泳部に入部したのは昭和三十四年、岩中に入学した時であるが、当時は、「水泳の岩高」、「岩高の水泳」と言われていた正に黄金時代であつた。私自身にしても、岩中、岩高を通じての六年間、県内の学校単位の大会で敗戦の苦汁を味わうことなく過ごせたことは幸福であつたし、このうえない誇りに思つている。

我々の入部当時、練習はもっぱら六尺の赤いふんどしを締め、さしずめ「赤ふん軍団」とでも称したい格好で、こいつを仲々うまく締めることができず閉口したものである。現在のカラフルな水泳パンツ流行と比較すれば隔世の感がある。

現役生活中の楽しい思い出といえば、大会で各地に遠征したことや、プールの水の入れ替えのため部員室に宿泊し談笑したこと、雑魚取り、志戸平温泉での冬の合宿、芋の子食い、ワンコそば大会等、数々あるが、最大のものやはり試合で勝つた瞬間であろう。この時ばかりは誰彼構わずプールに放り込んで大騒ぎをしたものであつた。反面、つらい思い出といえば、枚挙にいとまがない。全て練習にまつわるものばかりであるが、シーズン初めの寒い中、名物の風呂につかりながらの練習。プールに水のない時、掃除の後、一高や下の橋中、城南小のプールを借りてのジブシーさながらの練習。とりわけ夏休み中の合宿は過酷な練習のピークであつた。校舎の一角に寝泊りし、自炊しながら、早朝、午前、午後の三回練習。先輩からの差し入れはあるものの、ろくなものを食えな

い。夜、抜け出してパンやラーメンを食つたり、水やアイスクリームを食つている現場を見つかりカミナリを落されたりした。一日、一万メートル前後の練習量であつたから疲れ果ててしまい、寝ることだけが唯一の楽しみであつた。卒業して、いざ自分がその立場になつてみて、つくづく思うのであるが、先輩とは気まぐれなもので、母校が強いとなれば、大いばりで練習や試合に顔を出す、弱いとなれば手のひらを返したように足が遠のいてしまうものである。我々の現役時代、先輩が練習を見に誰も来ないということはなかつた。よく来てくれた。ことに合宿中はひっきりなしで練習中は緊張の連続で気を抜くことは許されなかつた。練習をさぼることはできず、一生懸命泳がされる。一生懸命泳げばタイムも伸びる。先輩に練習を強いられて、耐え抜く度合が強ければ強い程、その代償としてすばらしい結果がもたらされることを覚えた。合宿でのつらい練習が、その後どれだけプラスになつたかはかり知れない。OB連中がプールに集合すれば、それだけでOBと現役間のコミュニケーションが密になり、結束が強まり、チームワークが整う。このような好循環の蓄積が伝統であり、目に見えぬ強さを発揮させるのではなからうか。先輩とはきびしく、うるさい存在であると同時にありがたい存在でもある。

現役生活中に悔いの残ることといえば、東北大会で一度も優勝できず、三位入賞すら果たせなかつたことである。当時は新潟勢が圧倒的に強く、その壁をどうしても突破できずに、毎年四位に甘んじてしまった。が、その後、後輩の奮闘よろしく、逸材茂庭を擁した昭和四十二年にこの夢はか

なえられた。この朗報を聞いた時は思わずうれしさと喜び上つたものだった。岩高が東北大会で優勝したのは後にも先にもこの一回限りである。

岩高にプールが設立されてから二十余年を経過し、その間、どれほどの選手がこのプールから輩出したことだろう。最近の水泳部の衰退ぶりを見るにつけ、かつての隆盛をもう一度と願わずにはいられない。以前、岩高が強かつた時代は、必然的にそうなるような好条件がそろっていた。まず、人材が豊富であつたことが挙げられる。岩中水泳部が高校と一緒に練習をし、徹底的に鍛えられ、急速な成長を遂げ県下を制覇する。その原動力となつた選手がこぞつてエスカレーター式に岩高に進学するから、岩高は勝つて当然であつた。また当時はプールのある学校が少なかつた。プールがあるというだけで絶対的有利な条件を具備していた。高体連と県体の二つの大きな大会は岩高のプールで開催され、我々は県下の一流選手の泳ぎをつぶさに観察できる機会に恵まれ、良い勉強になつたし、大きな刺激を与えられ、発奮する材料にもなつた。極論すれば、岩高は黙つていても強くなるような環境に恵まれていたのだ。岩中の生徒数が激減し、設備の整つたプールが各校にどんどん新設されている現状とを対比し、強くなれと言ふのは、いささか無理な注文かも知れないが、だからといってこのまま腕をこまねいてしまつてはいはずはない。水泳部を弱体化させてしまつた原因はいろいろあるとは思ふが、率直なところ我々にも責任の一端がある。岩高は何をせずとも勝つという安易な気持ちで後継者の養成をないがしろにしてしまつた。この事実を謙虚に受け止め、反省

すべきは反省し、早急に打開策を講じなければならぬ。昔と違い悪条件下とはいへ、所与の条件の中で、いかに水泳部を再建させるか、そのための努力と援助、協力こそが我々OBの責務ではなからうか。まずもつて桜泳会の組織を強化し、話し合いの機会を持ち、皆で忌憚のない意見を交換し合い、今後進むべき方針を検討することが肝要と思ふのである。一時、水泳部は壊滅し、一年間の空白ができてしまつた。昨年、数名の一年生が入部し、どうにか水泳部はよみがえつた。この貴重な部員らに、我々が味わつたあの勝利の喜びを体験させてやりたいと思うのは一人私のみではあるまい。新しい土壌に発芽した新生水泳部に花を咲かせ、実を結ばせることは我々の切実な願いである。学校当局にもクラブ活動に対するより一層の理解と協力を切に望む次第である。

寄宿舎あれこれ

戸嶋正夫
(前舎監)

○寄宿舎の初期

学校創立者三田義正翁は、生徒の校外における教育の場として寄宿舎を設け、予習復習はもとより、風紀の指導監督は専ら寄宿舎生活に待たねばならぬという考えから、中津川畔の水清く空気のよい閑静な環境である加賀野春木場(現在の加賀野四丁目)の敷地一、〇〇二坪に設立された。

寄宿舎は三棟で逐次積慶寮、重暉寮、養正寮と学校の教育目標でもあつた三綱領よりその名を取り入れて、舎生日常生活の目標と、自主独立の気

風を養うような心がけられた。

○野菜類の自給自足

勤労作業と共同心の養成を目的として野菜作りに励む、収穫の多きを念じ、舎生も汗を流す愉快な時間の一コマであつた。

戦時中はテニスコートも畠に変わり、当時の食糧事情の苦しさなども味わつた。戦後も数年続き、舎生各自に責任範囲を定めて、氏名札を立てさせたことなども思い出になつてゐる。

○寄宿舎の一部臨時教員住宅となる

昭和二十三年〜二十五年頃まで戦後の住宅不足は教員にも影響し重暉寮の各部屋は臨時に教員住宅となり、家族も多く賑やかな生活であつた。

○積慶寮焼失

昭和二十七年二月二十六日十時五十分積慶寮の一室より出火同寮一むね(七十七坪)を全焼した。当時は十一名の舎生で全員登校中であり、火災の通知を受け舎生及び生徒達も急ぎかけつけたときは既に遅く、火の手が廻つて一物も持ち出さず、夜具、机、教科書類などすべて焼失し、重暉、養正の両寮に分散収容した。

○規則正しく

寮生活では礼儀、作法を特に指導している。その点学校生活には見られない上級生に対する礼法また下級生に対してはいたわりと親しさ等、寮生の親睦と友情が常に融和されるよう努めてゐる。

○日課をたどつて

・毎朝六時三十分には全員ラジオ体操を実施し
点呼の場として日々の出発点である。

・掃除 六時四十分〜七時

各自の部屋外に割当の個所があり全員黙々と

その務めに忙しく動く。

・朝食 七時

食事当番は主に下級生で、炊婦さんの手伝いで食器を並べ、全員着席してから食事となる。こんな膳も寮でなければ学べないことの一つである。

・登校 七時四十五分

学校との距離は約三キロメートルで二十五分位かかる。最近舎生の多くは自転車通学になつている。

・夕食 六時

帰寮が各人異なるため全員そろふことは余りない。その後は自由時間となる。

・自習時間 七時～九時

復習、予習の時間であり、その後も継続してもよいことになつている。根気の続かないものがおつて時々注意もされる。

・消灯 十時

更に勉強するものは延灯許可を受けることになつている。よく勉強に励んでいる生徒もいる。

寮歌

細谷地祐助

(昭和38年卒)

人の心には、喜び、悲しみ、希望がこめられている。これらは一生の思い出となつて心に刻まれる。これらの要素は一人の人間の成長の過程において感じ方の相違はあるだろうが、特に敏感に、感情的に、あるいは激しくその心を打つ過程は十代の成長期ではないかと思う。

十代の心に与える歌もまた成長期の人間の心に深く入りこみ忘れたい一生の思い出の要素を与えてくれるものである。

日本人は、特に国歌とか校歌というものに背筋をひきのばすような感激をもつてきき歌う国民であるように思う。これは自分たちの国、自分たちの学校を愛し、誇りと思う気持が強い国民性だからではないだろうか。

校歌は学校生活をしているものにとつて象徴となる歌であると同じように寮歌は寮生の青春を代表する歌なのではないだろうか。

私が寮に入つた三十五年にはこの寮歌はなかった。三年になつたとき当時の舎監をされていた戸嶋先生が寮歌を作ろうではないかということで作詞を先生がされ、曲は先生の大学の母校の曲を借りることになつた。さて何日かたつて歌詞は出来上つたものの曲は戸嶋先生しか知らない。どのようにして寮生に教えたらいいか考えなければならぬ。もちろん戸嶋先生が音楽担当の先生ならば問題は簡単なのであるが……。考えたあげく当時小生が音楽を少々かじつていた事もあつて、先生が歌いそれをテープに吹込み、そのテープを聞きながら小生が楽譜に直して皆に教えることにした。一日余りかかつて出来上つたものをトランペットの伴奏で皆に教え一応全員修得した。

さて初めてこの寮歌を先生をまじえて全員で歌う機会をもつた。何の会だつたらう、歌い終つて私が教えたメロディーとテープに吹き込んだものと違ふというクレームが戸嶋先生よりついた。その後修正が加えられて寮歌は出来上つた。そしてとにかくも次の会に皆で歌う時には正しいメロデー

ィで歌うことが出来た。このようにして出来上つた寮歌はその後も常に寮のあらゆる会合の時には校歌と共に斉唱され、受けつがれていることだろう。

あの広い敷地、広い建物の中での規律正しい生活と共になにかの時に歌い合つた寮歌は若者に心の満足を与え、心をひきしめ、そして背筋をひきのばさせ、心深く刻みこまれ、今なお思い出の泉の源となつている。

ただ、心残りは修正を加えはしたもののあの時の採譜が間違つてはいないだろうかということだ。

山中先生のこと

阿子島 寛

(昭和13年卒)

山中順三先生が英語教師として岩手中学校に來任されたのは、確か私達第八回卒業生が入学した年だつたように記憶している。以来五年間、先生の薫陶を受けたのであるが、私にとっては、いちはん思い出の深い先生である。

山中先生の教育には、情熱と愛情があつた。その情熱は時として「愛のムチ」に変わった。いまだなら暴力沙汰になるところだろうが、当時は「当前」のことで、宿題を怠つた生徒には容赦なくピンタが飛んだものだった。怠け者の私なども幾度かその洗礼を受けており、いまでも当時を思い出して頬のあたりをさすことがある。

話が飛ぶが、佐々木哲郎校長も山中先生と同じ時期に來任されたはずである。金田一京助博士とは竹馬の友のはずだが、博士の著書「思い出の人

々」の中に「てこさん(佐々木氏)は表情たつぷり、身振りたつぷりでグループを喜ばした」とある。それを読んで私はハタと思い当たることがあった。

石黒英彦知事の時代、私立中学校まで含めて県下一斉の学力テストが行われたことがあった。その英文和訳の出題の中に「passive(城)」という単語があったが、岩中の生徒には正解者が少なかった。朝礼の壇上の佐々木校長は「こんな単語がわからんのか」と拳を頭上にかざして嘆かれた。

「身振りたつぷり」のそのご表情が、いまなお鮮明に記憶に残っている。

教師にも生徒にも厳しかったそういう名校長につかえられた山中先生であったから、英語教育には一段と熱がこもっていたのであろう。初めて英語を学ぶ者にとって、発音勉強は最大の苦痛でも

あったが、先生は、最初から万国音標文字で教えられた。他校生が使っている振り仮名付きの辞書を見るたびに、うらやましく思ったものであるが、先生は「難儀を避けては英語は覚えられぬ」と、やかましく指導された。

その独得の教授法によつて「勉強の仕方」をたき込まれた生徒は少なくなかろう。大方の恩師は「八回生はよく勉強した」と言う。それが本当なら教師の情熱の反応としての勉強意欲ではなかつたろうか。中学時代の不勉強にもかわらず、私は後年、中国語を勉強することになったが、難しいこの言語の発音に、どうにかついて行けたのも、山中先生のおかげと、そのたびに感謝したことだった。

岩中に赴任された当時の山中先生は、そのあたりでいう「ハイカラさん」でわれわれは「慶応ボ

ーイ」と呼んでいた。当時独身の「山中青年」は日曜日には替え服を無造作に着込んで、山岸あたりを散策しておられたもので、田園の娘らは、しばし農耕の手を休めて瀟洒なこの「若者」をしげしげと見ていたものだった。

余談になったが、山中先生の思い出はつきない。校長としての氏の力量は知らぬが、「教壇の人」としては得がたい存在ではなかつたろうか。校長を辞され、離県されてからも一、二度お便りをいただいたが、不勉強の悪童にまで末長くこうして声をかけてくれる教師も世の中には珍しいのではなからうか。先生にはいまなお人生の道標を与えられている気持ちで、頭が下がる。恩師に拙稿を詫び、ご健康を祈ってペンを置く。